

平成21年度京都広報賞知事賞受賞作品等の概要

審査委員	広報紙の部	滝川 直明氏 藤田 晶子氏	(京都新聞社編集局ニュース編集本部編集局編集委員) (京都リビング新聞社営業本部営業・編集総括マネージャー)
	写真の部	山岡 正剛氏	(写真家、日本写真家協会会員)
	映像の部	松田 壽長氏	(㈱電通中部支社メディア・コンテンツ局プロモーション営業推進室プロモーション推進2部長)

部門		作品名等	作品の規格等	講 評
広報紙の部	市の部	綾部市 広報あやべ「ねっと」 10月号	A4判 12ページ 年12回発行 16,000部	<p>ページ数は多くないが、編集技術が優れている。モノクロ、単色カラーという制約を感じさせない紙面作りが光っている。</p> <p>フロント面の写真は、中学生の職場体験学習。生徒の自然な表情が良い。</p> <p>2面から始まる自転車特集は、丹念な取材の成果で、記事が上手い。行政からの「お知らせ」という匂いがしない。読んでみよう、という気分になる。5面には里山サイクリングの記事も付け、特集を完結させた。元気な住民が大勢登場し、読者を元気づける紙面となった。</p> <p>6、7面の決算の記事は分かりやすい。グラフに写真を添えるという、「分かりやすく伝える工夫」がある。一般市民にはなじみの薄い予算用語の説明もあった。親切的な編集で好感が持てた。</p>
	町村の部	大山崎町 広報おおやまざき 3月号	A4判 20ページ 年12回発行 6,700部	<p>昨年に引き続き、編集センスの良さで他を圧倒する作品だった。あえて子どもの泣き顔を選んだ表紙写真にまず惹きつけられる。リサイクル特集も、押しつけがましきのない記事構成がよい。多くの読者が共感を持って読んでくれたのではないかと。地味な記事だが、町職員給与の「勇気ある公開」も評価したい。風当たりもあるだろうが、オープンにすることで町民の信頼を得ることこそ、広報の本来あるべき姿だ。</p> <p>文章は全体に明快で書き手の余裕すら感じられる。担当者が交代したときにも同レベルが保てるよう、後継者を育てるのが今後の課題かもしれない。</p>

部門		作品名等	作品の規格等	講評
写真の部	一枚写真の部	与謝野町 広報よさの 6月号表紙 「刀身」 松本 潤也	春の例祭「岩滝祭」で木積神社に太刀振りを奉納する演者の青年を撮影。木々の間から漏れる光をスポットライトに見立て、淡く光を放つ太刀をみつめる青年の表情を引き立てせるべく、中央重点測光でシャッターを切った。 誌面掲載にあたっては、レタッチでコントラストを少し上げることにより、写真のもつ不思議な魅力を引き立たせる「光と影」を強調。	モノクロトーンの印刷がきれいで、空の焼き込み・観衆や木々のシルエットなどで全体に引き締まった作品になっています。また境内に差し込む地面の陽だまりに太刀の白い飾りがポイントとなり効果的ですし、青年の視線と鈍い光の太刀に、その場の光の状態からの絞った構図は見事でした。作者の意図するイメージ・それを表現する技術は素晴らしい。
	組み写真の部	与謝野町 広報よさの 6月号2～5ページ 「与謝野の祭。」 和田 直樹 山口 周作 松本 潤也	与謝野町では、毎年春になると、住民の大多数が参加する「加悦谷祭」「岩滝祭」「三河内曳山祭」が町内各地区で行われる。これらは、与謝野町の伝統と文化を体現できる行事であり、住民が誇りにしている与謝野町を代表する行事でもある。祭事の内容は地区ごとに異なり、その違いが各地区のアイデンティティーともなっている。 撮影にあたっては、広報担当3人が総力を結集し、さまざまな視点で多様な祭の姿に迫った。 2,800枚を超える撮影枚数から各地記バランスを考慮して写真を選び出すことは非常に困難だったが、写真でしか見られないような祭の一面や熱気が伝わるような写真を選び出し、背景を黒にすることで伝統ある祭の様子を格調高く組んだ。	3名での合作とは思えないほど統一感があり、イメージの共有と編集指示がしっかり出来ていて見事だと思っています。デザインも黒をベースに写真の強弱を上手く配置し、祭りの人々を前面に出すところなど素晴らしいです。各写真も祭りを知ってこそ撮れるものだと思いますし、トリミングやタイミング・技術的な良さもうかがえます。昨年と同じテーマでの参加で採点は大変難しかったのですが、高い質を維持されている点を高評価しました。
映像の部		宇治市 行政サービスに新しい風 ～ごみ収集と安否確認～		平成21年4月から宇治市で試行されている行政サービス「ごみ収集と安否確認」を丁寧に紹介した広報映像である。構成はサービスを受ける側の市民の声や行政側の思いがインタビュー取材でまとめられている。またサービスを受けるための手続きなども丁寧に紹介されており当初の狙い通りのより多くの人にこの行政サービスを知ってもらうという意図

は十分伝わってくる。また映像の技術的な面も問題なく質の高い作品として仕上がっている。しかし、構成、編集等の面では、市民の声とこのサービスを提供する職員の思いを併せて構成することで双方の心の交流を感じさせるという当初の狙いは少し弱かったのではないか？取材した市民の方々の話にとっても説得力があり、また自然な言葉で語られていただけに職員の登場（インタビュー）シーンの演出に工夫がほしかった。また時間的に制約があるとするならば業務紹介の流れの中で職員の声をかぶせてみる方法なども考えられるのではないか。とかく硬くなりがちな職員の業務に対する声をもっと自然に柔らかく表現できたかもしれない。さらに映像全体の流れの面でも残念ながら職員のインタビューシーンで流れが止まってしまったのはとても残念である。この作品のヤマ場は何と言っても市民と職員が会う「玄関先」である。ここに構成の力点をおき演出してみれば更に良くなったのではないだろうか。そうすることで作品のトップカットから構成が変わってくると思う。

しかし、ごみ出しが困難な世帯に対しての玄関先収集やその際の声掛け、安否確認ができるこの行政サービスは私自身この作品で初めて知らされ、また利用者の三人のインタビューで語られる行政への感謝の声には感動させられるものがあった。
何を伝えるのか、テーマ設定がしっかりとした作品で成功したといえる。